

Title	パスカルと習慣の問題
Author(s)	三輪,正
Citation	カルテシアーナ. 1986, 7, p. 1-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

輪

正

論にはその洞察の深さにおいて、デカルトをもモンテーニュをも大きく超え出るところがある。 一頂点をパスカルに見いだすであろう。以下はその論証の試みである。 習慣・慣習の考察においてパスカルはデカルトと同様、モンテーニュから多くを受けている。 しかしパスカルの習慣 習慣論はその比類ない

第一章 『パンセ』の習慣論とモンテーニュ

フュマ版とブランシュヴィク版の番号を示すことにする)はラフュマ版では第三章「悲惨」の章に入っている。習慣・ tice qu'une rivière borne」の含まれる断章(L六〇・B二九四——本論文では『パンセ』の断草はかような形でラ ろでモンテーニュのこの言葉を直接受けつぐパスカルの有名な言葉「河一つで仕切られる滑稽な正義よ plaisante jus-しただけで罪悪となるような善とは何であろうか……」で始まるモンテーニュの言葉に関連してその点にふれた。 められることはよく知られ、多くの論者の指摘することである。我々も前々号でモンテーニュを論じた際、 『パンセ』の中に習慣・慣習についての断章がかなりあり、その多くにモンテーニュの直接あるいは間接の影響が認 「河一つ越

1

2 恐れの念に襲われる習慣的想像力の空しさであり(L二五・B三〇八及びL四四・B八二参照)、そのような想像の上 慣習は悲惨なこととして先ずとらえられるのである。緯度が三度も違えばひっくり返るような慣習や法律、 うしようもない空しさ悲惨さである(L二○・B二九二、L五一・B二九三、 L九・B二九一)。 に立つ王の権力の空しさであり(L二六・B三三〇)、「河一つへだてた」だけで互いに殺し合わねばならぬ人間のど の章に集中的に組み入れられているのは、我々にとって興味深いことである。空しさとは、王を見るとおのずと尊敬と い人間はいかにも悲惨だというのだ。『パンセ』で習慣に関する考察がこの「悲惨」の章と、その前の第二章「空しさ」 な年月で改変され、結局は流行以上のものでない正義(L六一・B三○九参照)、そんな法律や正義にしか頼るもののな モンテーニュが驚嘆 ほ んの僅か

て重要な職業選択を左右するのも多くは習慣である。「習慣 coutume が石工、兵士、屋根屋をつくる……。 る(L二六・B三三〇、L六〇・B二九四)。 それどころか習慣の力は様々な領域にわたっている。 人間にとって極め しさを語る同じ断章で、習慣というこの国家の基盤が実は他の何ものよりも確実な基礎であることをも力説するのであ もちろんパスカルも習慣のもつ力を知らないではない。国王や国家の権威が習慣としての法や正義に依存するという 逆に言えば習慣がそれほど巨大な力を国民の上にふるっているということである。パスカルは権威の基礎の空

すべき力を持つものとした習慣が、パスカルでは人間の空しさ、悲惨さそのものとされるのだ。

の考え方を我々にとって容易にし、習慣のないことが他方の考え方を不可能にする。これが大衆の判断の仕方だ」(L を恐れずにはいられなくなり、ほかのことを信じない」(L四一九・B八九)。習慣は判断をも左右する。 四・B九七)。 信仰も習慣のいかんにかかる。「習慣は我々の自然である。 信仰に慣れるものはその信仰を信じ、 は極めて大きく、自然がただの人間として作ったものからあらゆる身分の人間がつくり出されるほどである」(L六三

偉大さも悲惨さの結果である」(L一二二・B四一六)とすれば、人間の偉大な力の源泉としての習慣が、その悲惨さ の証しそのものであることは、むしろ当然のことであろう。 ようとはしない(L七三六・B九六参照)。習慣の力はかくも巨大である。「悲惨さは偉大さ grandeur の結果であり、 八八二・B二二二)。人々は 自然現象の説明でも、 誤った理由に慣れてしまうと、正しい理由が発見されても受け入れ

cipes naturels sinon nos principes accoutumés?……。異なる習慣は我々に異なる自然的原理を与えるであろう。そ 原理があるとすれば、自然によっても、第二の習慣 seconde coutume によっても消せない自然に反する習慣も存在す れは経験によって明らかである」(L一二五・B九二)とパスカルは書いている。 もっともこの断章でつづいて出てくる から分れるのである。自然をどう捕えるかにおいては、パスカルはモンテーニュに従がい、自然を習慣と不可分なもの 以上から明らかなようにパスカルは習慣の力の承認においてモンテーニュに追随するがその評価の点でモンテーニュ それは素質 disposition によることである」。同じ曖昧さはしばしば引用される次の断章にも指摘できる。 習慣と自然との関係に関して、文章自体も内容から言っても曖昧である。「習慣によって消せない自然的 「我々の自然的な原理とは我々の習慣づけられた原理でなくて何であろうか Qu'est-ce que nos prin-

B九三)。かように自然を第一の習慣とみなし、 スカル習慣論のモンテーニュのそれを超える特色として言われる。フンケもその一人で、彼はその著書『習慣』で「第 第二の自然であるように、 この自然それ自身も第一の習慣に他ならないのではないかと大いに危惧する」(L一二六 習慣をもって自然をも包含する類概念のように捕える考え方は時にパ

一の習慣としての自然」の言葉を、パスカルを扱った章の表題にしている。しかしパスカルの言葉は必らずしも明確で

は第二の自然であって、第一の自然を破壊する。しかし自然とは何だろう。なぜ習慣は自然ではないのか。私は習慣が

4 ないし、習慣と自然との不可分な相互関係はモンテーニュも既に語ったことであって、自然は第一の習慣という考え方 をもってパスカルの特色というには当らないように思われる。

ayant accoutumé いるので……あまりにも無味乾燥で詳しく見る習慣のまったくない n'ont point accoutumé が、 ものが習慣の所産とされるのである。同じ趣旨が別の個所では、「我々の魂は身体のうちに投げこまれ、そこに数、 ている。 的精神と繊細の精神との区別においても、パスカルはこの二つの精神を共に習慣と密接に関わるものとしてとらえる。 それだけしか信じないものであるということを、 原理を通らねばならないとなると、驚きのあまり反撥し、反感を抱いてしまう」(L五一二・B一)とパスカルは書い 個所で habitude の語を使っている)……。 てその方へは頭を向け難い。習慣が欠けているからである manque d'habitude(パスカルは『パンセ』では珍しくこの 九・B八九の後半に見られる次の言葉である。 「幾何学的精神においては、 (L四一八・B二三三)と書かれている。デカルトらによって生得の真理、 習慣と自然との関係の問題よりも我々にとってより興味深いのは、 三次元空間を見いだす。魂はそれらの上で推理し、それを自然、必然と叫び、他のものを信じることができない」 実は習慣の産物であるかもしれないというのである。 ……繊細な事柄にぶつかると途方に暮れる。 別の個所でも「直感によって判断する習慣のついている accoutumés 人々は推論に関する事柄では何も理解 原理はあたかも手でさわれるように明らかであるが、通常用いられるには遠い。 幾何学者は幾何学のはっきりしてはいるが粗い原理に慣れて accoutumés 「我々の魂が、数、空間、 誰が疑りであろう」。ここでは合理主義の哲学が実在そのものとした ……これに反して繊細な精神の人々は一目で判断するのに慣れて ブランシュヴィク版 『パンセ』 の冒頭を飾る有名な幾何学 信仰に関して既に引用したことのある断章し四一 運動を見ることに慣れたため、それを信じ、 自然の光による絶対的真理、とされたもの したがっ

これに反して原理によって推論する習慣のついている他の人々は、直感に関する事柄についてもそこに原理を求めよう り、幾何学的精神と繊細の精神との区別が天分の違いというよりむしろ習慣の違いとして考えられていると言ってよい として一目で見ることができないので、何も理解しない」(L七五一・B三)と書かれている。かような文章で見る限 しない。彼らは一目で見ぬこうとするが、原理を求める習慣がついていない ne sont point accoutumés からである。

慣の問題」の第三章で見たように、習慣の問題は変化のそれと不可分にからみ合っている。「人間にとって何より耐え である」(L七九・B一二八)。かって楽しかった習慣的生が突然に堪え難いものとなるのである。 tissement と題した第八章の主題の一つでもある。 怠すべき理由が多数ある時でも、 理由が何もない時でさえ、 の時ひとは自分の空しさ、寂しさ、足りなさ、頼りなさ、力なさ、うつろさを感じる。たちまち魂の奥底から、 難いのは、完全な無為のうちにあって、情熱もなく、仕事もなく、気晴しもなく、熱中することもないことである。そ 日楽しく過したとする。元の仕事に戻る時男はどんなに惨めな気持になることだろう。それはまことにありふれたこと て浮かび上らせる。 であろう。習慣の違いということは、学習によって向上を期待できるということでもある。 パスカルの鋭敏な洞察力は単調な日常の習慣的生にひそむ楽しさと空しさとの矛盾的共存を倦怠 傷心、 悔恨、 倦怠はパスカルが彼の『キリスト教護教論』の第四章の表題とした言葉であり、また気晴し diver-自分の体質の状態そのものによって倦怠に陥入ってしまうほど不幸なものである。 絶望がわき起る」(L六二二・B一三一)。 さらにパスカルは 「このように人間は、 玉突きをして玉をちょっと転がすだけでけっこう気がまぎれてしまう。 「仕事を楽しんで生きている男がたまたま一人の女性と出会って数 「モンテーニ ennui しかも倦 倦怠、 倦怠の

いは説得

トリックの問題として、更には自動機械としての身体の支配の問題として展開されるだろう。

パ テーマだった。 ŋ じ人間のたわいなさがはしなく露呈される。倦怠はフランスのモラリストやスピリチュアリスムの哲学が好んで論じた スカルの『キリスト教護教論』の主題であり、それは具体的には結果の論理 raison des effets の問題として、ある 無限を内に秘める人間の偉大さがそこに顔をのぞかせる。その倦怠がごく些細なことで霧散する。そのことにも同 パスカルの場合それが人間の悲惨さ、卑小さの証しとされる。この悲惨さをどう克服するのか。それが

を遡って顧りみなければならぬ。そのことは習慣のパスカルにおいて持つ意味を更に深く捕えるためにどうしても必要 得ないのである。その彼にどうして習慣が大きくクローズ・アップされてきたのか。その経緯を我々はパスカルの生涯 めたものであった。習慣・慣習の如き問題が若いパスカルの関心の中心にあったとは、 に属するものであることからも察せられるように、 以上我々は『パンセ』に見られる習慣論的問題を通覧してきた。ところで『パンセ』がパスカルの思索の生涯で晩年 習慣の諸問題に対する関心はパスカルにとってむしろおそくに目覚 次章で見るように、 到底思われ

第二章 『プロヴァンシアル』以前のパスカルと習慣への無関心

である。

でもパスカルが誇らかに述懐することである。発見、 である。それは未知の理論、 の計算機の発明であった。これらは習慣・慣習の如き問題とは直接関係がないばかりか、 若き日のパスカルの関心の対象は、 全く新しい機械の創造、 あるいは数学であり、あるいは真空に関する科学的実験であり、 発明に関して彼は次のように言う。「それは力の結果であって、 発明の問題であって、それが習慣と無縁なことは『パンセ』の中 真向から対立しさえするもの あるいは人類初

習慣に対する同じ否定的態度はパスカル二八歳の時に 書かれたとされる 『真空論序言』 からも看取 することができ この序言では歴史、 地理、法律、言語、神学のように書物に頼る他ない学問と、幾何学、算術、音楽、自然学、医

建築学のように経験と推理に頼るべき学問とが区別され、

前者の学問では書物の著者ないし書物そのものが権威と

ものの墨守としての習慣の如きは人類において何ら尊重に当らない筈のものであることになる。 うことになるとパスカルは言う。人類は「絶えず学ぶ一個の人間の如きものであっ」て、不断に進歩し向上する。 たえず増加するものであり、 なるのに対し、後者の学問では書物の権威は有害無益であって、理性こそ権威となることが主張される。そして経験は いて古代人を尊重するのは、 我々近代人の方が古代人の知らなかったことをも知り得るのであるから、 人間の理性を軽視して動物の本能と同列に置き、本能と同様全然進歩しないものとして扱 後者の学問にお

する、ということにあるようだ。もっとも、 『愛の情念について』と題される小論文もその基本的主張は、愛の情念が慣習的なものではなく自然そのものに由来 「流行 mode や土地環境 les pays が、いわゆる美をしばしば規定する。

8 習慣 coutume がこんなに強く我々の情念に関っているのは奇妙なことだ」という言葉もある。一見美の相対性を言う

地域の慣習をものりこえるというのだ。この「美の観念」という言葉については、その少し前では「美のこの一般的観 て美しいと思い、美の模範 exemple であるように主張する」ということにあるようだ。つまり美において各人はその 念 idée de beauté を持っていて、それによって他の美を判断し……、その原理にもとづいて男は自分の愛人をすぐれ ように思われる。しかしパスカルがそこで言おうとすることは、「(それにもかかわらず)各人はそれぞれ自分の美の観

スカルははっきりと書いている。「男が女性の愛情を得ようとして進み出るのは習慣の結果 effet de la

探す」と書かれている。愛には本源的、原初的なものがあって、習慣・慣習には還元され得ないというのだ。

に際しては大きな差異を許すものであって……、各人はそれぞれ美の典型 original を持ち、そのコピーを広い世界に 念 cette idée générale de la beauté は消し難いしるしによって、我々の魂の底に刻みつけられているが、個々の適用

opposée を持っていたことを思いださなくなる。」愛の情念は、観念の面からみても、 自然の面からみても、 習的なものとは殆んど無縁なのである。こうしてパスカルは、発明発見の才について語った『パンセ』の断章を連想さ もまたたく間に変えてしまう。「けちな男も恋をすれば気前がよくなる。 そしてかっては正反対の習慣 une habitude では決してない。 それは自然の定め obligation de la nature である。」恋愛の力には大きなものがあって、人の性質を 習慣的慣

慣 habitude によっては決して獲得されない。人はその諸特性をより完全にするだけだ。」 『愛の情念について』の小論の中にも書きこむのである。 「精神の諸特性 les qualités d'esprit は習

習慣的なものに対する同じ無関心は『サシ氏との対話』にもうかがうことができる。

一六五五年パスカル三二歳の時

行なわれたとされるこの対話は、 エピクテトスとモンテーニュとを主な話題とするが、 エピクテトスは措いてモンテー

苦悩するパスカルの姿を我々は見て取ることができよう。 ないと知って乗っているのではないから、哲学者にはふさわしからぬやり方である」とさえパスカルは書いている。 のかなり手きびしい非難には、 いら理由で馬に乗っているようなものであって、自分の方に馬を使用する権利があり馬の方には自分を使用する権利 して言及されるに止まる。 でモンテーニュにならって大きく力説されるあの正義の相対性の問題はこの『対話』では懐疑主義の法律への適用例と なことは認めるが、不信仰や悪徳への傾向を助長する点において危険なものを持つことを強調する。 = ス 2 mœurs de son pays parce que la coutume l'emporte」ものであって、それはちょうど「馬が反抗しないからと ハカルは、 について見ると、この頃のパスカルの関心がほとんど専らモンテーニュの懐疑論に向けられていることがわ モンテーニュの懐疑主義が勝手に正義を主張する輩や自己の見方に固執する輩の独断を矯正するのに有効 パスカルによればモンテーニュは 支配階級の一人として民衆の苛斂誅求に当らざるを得ない父の職業を通し社会の矛盾に 「習慣の導びくままに自国の風習に従がう il suit donc しかし『パンセ

争を契機としてである。 易ならざる形で重大な問題としてクローズ・アップされるのはこの『対話』の翌年早春から始まるイエズス会相手の とはあれこの段階では慣習・習慣の問題はパスカルにとって未だ大きな問題とはなっていない。 我々は目をこのふつう『プロヴァンシアル (田舎の友への手紙)』と略称される一連の手紙に向 それが彼にとって容

『プロヴァンシアル』と習慣の問題性 -プロバビリスム及びカズイスチックの批判

『プロヴ ァンシアル』の論争自体の発端はよく知られているように、 ジャンセニウスの著書の解釈をめぐるパリ大学

10 神学部とアントワヌ・アルノーとの対立である。この対立の背景にイエズス会とポール・ロワヤルとの対立があり、 縁ではないが、 の対立が当時の政治と複雑にからむこともよく知られていて、我々がここで特に述べる必要のないことである。 『第三の手紙』 以後においてパスカルが 恩寵論から 道徳論に移り、 我々の問題と直接関連のあるテーマは出てこない。『プロヴァンシアル』が習慣・慣習と大きく関わってくるのは 『第一の手紙』『第二の手紙』において、 恩籠と自由意志との関係の問題特に自由意志の有効性の問題になる。これらも習慣の問題と決して無 近接能力、 イエズス会の道徳観を攻撃しはじめる時からであ 充分な恩寵、 有効な恩寵等が論じられる段階で 対立

特にその道徳観を支えるプロバビリスムとカズイスチックとを批判しはじめる時からである。

これに対し『プロヴァンシアル』で問題になる「蓋然論」は道徳的なものと不可分であって「何らか善いもの、 バビリティは数学的コンテキストでは確率と訳されるがその場合道徳的意味合いが何ら含まれないことは言うまでもな ものだが、日本語に訳し難い言葉である。ふつり「蓋然論」と訳されるが、野田又夫氏らも注意しているように、 意味に加えて「是認する」 ぼ同じ範疇に属して、 我々がこの言葉で連想するものとは全く異なったものである。「蓋然性」は今日では、 ものを持つ意見に従おうとする教説」を意味する。プロボ probo というラテン語動詞には「調査する」「確証する」の 従って今日「蓋然論」と言えば、正確な真理が得られない時に近似的真理に従おうとする態度として理解される。 ロバビリスム probabilisme は正確には「プロバブルな意見の教説 doctrine des opinions probables」と言われる 事柄が生起する可能性の多少を、 「賛同する」「推賞する」の意味があるが、 「推賞されるもの」の意味で使われるのである。(3) 道徳的なものから全く独立に、 『プロヴァンシアル』において 「必然性」「偶然性」などとほ 指示するものとされる。 「プロバブル」 妥当な

の語は「是認されるもの」

「プロバブルな意見」とは従って「是認さ

す、気に入る方を選べばよいのです il n'y a qu'à suivre l'avis qui agrée le plus」と答える。 する意見のいずれもプロバブルなのです」と。それでは選択に困るであろうと問われて、神父は「そんなことはないで(ヒン) 間の意見の対立がしばしばあると同様、 カルが est fondée sur des raisons de quelque consideration」のである。その「かなり重んじるに足る理由」としては多く(エ) は方法ということで、プロバビリスムと同様日本語に訳し難い言葉だが、ふつう、良心例学、道徳判例学、 くとして、対立する意見がいずれもプロバブルとして並存する時その解決の方法でもあるのがカズイスチックである。 して言われるこの「気に入る agréer」という言葉をパスカルは後に深刻に受けとめることになるだろう。それはともか 意見であることはほとんどありません。大ていの問題で或る人が然りと言えば他の人は否と言います。こんな場合対立 きものを持つ意見に従おうとする教説なのである。このこと自体には何ら問題はあるまい。問題が出てくるのは、 重んじるに足る理由にもとづいている時、それはプロバブルと呼ばれる une opinion est appelée probable, lorsqu'elle の人の抱く理由つまり世論であることもあろうが、 れ推賞される意見」ということであり、 「(博士達の)すべてが同じ意見でないのはわかりきったことです。 その方がむしろ好都合です。 「プロバブルな意見の教説」すなわちプロバビリスムとは多数者の意見であれ、一人の有識者の意見であれ、何らか善 カズイスチック casuistique とは「道徳意識(良心)に関わる具体的事例 cas de conscience」を考察する学問あるい あるいは単に決疑論と訳されている。法律学において、法律の具体的適用である判例が重視され、 『第五の手紙』の中で指摘するように互いに対立する意見が共にプロバブルとされる時である。 容易に出現する事態である。『第五の手紙』のジェズィットの神父は言う、 『第五の手紙』に出てくるイエズス会神父の言によれば「一つの意見がかなり 学識あり権威がある一人の博士が唱える理由でもよいとされる。 神父の勇み足のように 博士達のみなが同じ それは、 道徳問題決 学識者 パス

その研究が法

と弁証法とをいずれも、 時のように、 プロバビリスムと同様、 の中にちょうど注解のように断片的に織りこまれているものだ、としている。かようなものとしてのカズイスチックは(コ) 的に対立する主張を共に是認するプロバビリスムと結びつく時、ギリシアでソフィスト達がそのレトリックを展開した 解釈学として独立しているように、 ックとはレトリックであり、アリストテレスの言う意味での弁証法なのである。 トも『人倫の形而上学』の中でカズイスチックにふれて、それは学問でもなければ学問の一部でもないが、 る。それはその意味ではあらゆる倫理学道徳学に不可欠のものであり、 **詭弁の様相を帯びる可能性のあることは容易に察せられる。アリストテレスは『レトリカ』でレトリッ** 何ら非難され責められるべきものではない。しかしそのカズイスチックが、上述のような矛盾 対立する主張を共に説得し得る技術と定義したが、プロバビリスムと結びついたカズイス 倫理道徳上の諸法則の具体的事例への適用の仕方を論ずるのがカズイスチックであ 倫理学道徳学と共に古いものである。 倫理学体系 後にカン

blesse des hommes」宗教のきびしさを緩和して罪となるべき行為をもプロバブルな口実を設けて是認するために利用 ル も垣間見られるように、 されることとなる。このこともそれ自体としては非難に当ることではない。しかしその時プロバビリスムとカズイスチ の正義論・習慣論は、 ヴァンシアル』で厳しく批判し攻撃するものなのである。ところでこの道徳の背後にはこの『第七の手紙』の言葉に クは詭弁の範囲を通りこして、 ところでこのプロバビリスムとカズイスチックとが 広い意味にとられたキリスト教的な愛の 教説に 結びつけ られる 『第七の手紙』の中のイエズス会神父の表現によれば「人間の弱さに適応するために pour s'accommoder à la fai 習慣・慣習に関して寛容なイエズス会のあのアコモダチオの思想に連なるものがある。 かようなプロバビリスム、 放慢かつ堕落した道徳を生み出す元凶になる。この堕落した道徳こそパスカルが カズイスチックそしてアコモダチオの思想との対決を通して練り上 パスカ

パスカルと習慣の問題 クの論法こそこの悪名を招いた原因である。ちょうど「ソフィスト」の語が「詭弁家」という悪名に転落したように。 大きいと言われる程である。 言葉がその後「偽善、 煽動家として立ち現われる。 る は で再現する必要はないであろう。 パスカルはそれまでの透徹した科学者、敬虔な求道者という風貌とはうって変って、この手紙では、 スカ 明敏極まりない法理論家、 パスカルの簡潔で力強い文章は、 ルがイ ズス会士たちのプロバビリスムやカズイスチックをいかに批判し攻撃したか。その詳細を我々がここ 狡猾、 しかしそれはもちろんパスカルの力のみによるものではない。 老獪」という軽蔑的な意味合いを帯びるに至ったことには『プロヴァンシアル』の影響が 論争家としてのパスカルの破壊力には驚嘆すべきものがあって、 論争の経過を知るには直接『プロヴァンシアル』の第四の手紙以後をひもとくにしく 容赦のない批判家、 モリエールの喜劇でも見るかのように、 さらには観客の心を巧みに捕えて放さない劇作家、 我々を論争の現場に立会わせてくれ イエズス会のカズイスチッ 「ジェズィット」という あるいは大衆 恐るべき弁証

げられたものではなかろうか。

てなされた殺人であれば、殺人にはならず、律法を犯したことにはならないと論じられる。 l'intention J るものとは言えない」とすることによって、どんな金持ちでもあり余るものはほとんど持たないとし、 る義務から免れさせ、 をめぐる『第六の手紙』の議論、 ズイスチックの「狡猾な」議論の好例としては「あり余るものを貪しい人にほどこせ」という福音書の言葉の解釈 前者の議論ではカズイスチック学者は「自分や自分の家族の生活状態を高めるために蓄えている分はあり余 なるものを案出し、 施しをしない苛責から解放する。 「人を殺そう」との意図ではなく、 「人を殺してはならない」という律法の解釈をめぐる『第七の手紙』 後者の議論の場合、 「名誉を守る」「財産を守る」などの意図によっ 「意図善導の方法 ほぼ同様な仕方で『第八の méthode 彼らを施しをす の議論などがあ

à toute sorte de personnes」というロ実によって正当化されるのである。 で言い、嘘を大声で言りことだといり)、 偽誓の罪からも免れると論じられるのである。 そしてこれらの詭弁としか言 を使うことによって、つまり自分と相手とで意味が違うような言葉づかいをすることによって嘘ではないようにされ得 取ることが免罪される。それどころか『第九の手紙』では「嘘を言うこと」も「曖昧の教説 doctrine des équivoques」 手紙』では裁判官が原告被告から「感謝の印し」として贈物を受け取ること、商人が「取引のお礼」として利子を受け いようのない教説が、それによって「我々はあらゆる種類の人間に適応しようとしている nous nous accommodons と論じられ、更に「心内留保の教説 doctrine des restrictions mentales」を用いれば(それは本当のことは小声

る 手打ち souffiet」 るのだが、我々が次章に取上げる「結果の論理 raison des effets」との関係から興味深いのは、 である。彼はポル ある。パスカルが、いかにしても我慢がならない、という感じでカズイスチック道徳に立向うのも同感されることなの るモリナ」の名の下に主張されるのであり、その時それは哲学的宗教的にもゆるがせにできないものを持ってくるので る裁判官のやり方ではなく、 て出てきたものであって、現実に社会を動かす大きな力となっている。しかもその道徳が、行為を単に外面的に考察す にとって恐らく信じ難いまでに乱脈なものである。しかしその道徳は僧侶、軍人、裁判官、 以上の簡単な概観からも明らかなように、カズイスチック学者の打ち出す道徳は余りにも放慢であり、 これに対しイエズス会のカズイスチック学者は「頰に平手打ちを受けて復讐しようとすることは許されない。 の問題である。 トガル、スペイン、イタリア、フランスの道徳問題決疑論者の著書を縦横に引用しながら批判を続け 「行為者の意図を主に考察しつつ」意識の内部に立入って判定する道徳として、 「右の頰を打たれれば左の頰をさし出せ」というのはよく知られた福音書の教えであ 高利貸商人らの要求に応え 暴力の問題、 福音書の信者 特に「平 「偉大な しか

ずるにしても、 対立する時は正しいものが勝つ。 輩であり、これに対し自分は無垢の真理の側に立つものであって、目下の論争は暴力 violence て暴力と真理とでは勝負の結着のつけようがないことを言う。力と力とが戦う時には強いものが勝ち、 する奇妙な戦いだと規定する。 せるものだが、 歩み寄る。)『第十二の手紙』の末尾でパスカルは、 き恐れ、そして怒るのである。 して『第七の手紙』のパスカルは、 ある。名誉を守るためか、 し不名誉を晴らそうとして打ち返すことは許される。 以上の如く言う時のパスカルには、当面の論争の成否に対するあきらめの如きものが感じ取られるので 逆に真理もいかに輝かしい真理であれ暴力を抑えることは不可能で却って暴力を激化させるものであっ 財産を守るためであれば受けて立ち、 そして暴力はどんなに力をふるっても真理を弱めることはできず却って真理を振い立た (後に見るようにパスカルは「結果の論理」ではこのカズイスチックの道徳にある程 しかし暴力と真理とでは勝負にならないと言うのだ。(3) 一旦かようなことを許せばいかなる殺人とて許され得ないものはないと言って、 決闘をいどまれて拒むことは臆病と思われても仕方のないことで イエズス会士は力を恃みに何をしても罰せられないと思っている 相手を殺しても構わない」とするのであり、 たとえ真理の究極的な勝利を信 が真理を圧殺しようと 議論と議論とが

真理でもなしに、 純ではない。そこでは、 つの学問領域とは異なる領域の存在に気づかされる。 『真空論序言』でパスカルは、 医学等の学問領域で権威となるものとに違いがあることを力説した。『プロヴァンシアル』でパスカルはこの二 結果のいかん、 「原理からすべてを演繹する」数学的真理でもなく、また「経験が正否を判定する」自然学的 歴史、 効果のいかんが争われる現実の力が問題になるからである。この現実の力を論ずるの 地理、 法律、 言語、 それは力の領域である。この領域では科学的真理の場合の如く単 神学等の学問領域で権威となるものと、 幾何学、

16 し考えて見なければならぬ があの「結果の論理」である。 しかしこの論理の検討に入る前に我々は、 イエズス会のカズイスチックの性格をもら少

団としての当時のイエズス会がその武器として身につけた戦術であり戦闘要領なのである。 が 世界のさまざまな場所で布教に成功した、というのだ。この「親切で相手に即応した指導」のための道具あるいは方法 れはイエズス会ペトー神父の言葉として引用される言葉である)」によってイエズス会士はすべての人に手をさしのべ、 敵からは身を守る、 身分や国情の違いに応じてそれぞれに最も好都合な場合を考えようとし、それによって味方は離れないようにし、また 都合な時は守り、 あらゆる人の心をつかむのが宗教のためになると考え、人々の信用をかちとるため、 始めで、 イエズス会のカズイスチックであり、その思想的根拠がプロバビリスムである。それらはカトリック布教の戦闘的教 実はパスカル自身早くも既に『第五の手紙』でイエズス会のアコモダチオの性格を見抜いている。 事情通の友人の話しとして述べられるものである。それによると、イエズス会士は自分たちの信用が拡まって それが不都合な時には緩和してあらゆる人の満足を得ようとする、という。こうしてイエズス会士は というのである。つまり「親切で相手に即応した指導 conduite obligeante et accommodante 福音書の厳しい教えを守るのが好 それはこの手紙

には福音書と全く反対のことまで許容するものである。 激しい言葉で始まる『パリの司祭達のための弁駁書』で、イエズス会のカズイスチック学者を正面に据えて厳しく仮借(st) る のない攻撃を展開する。 Notre cause est la cause de la morale chrétienne. Nos parties sont les casuistes qui la corrompent. 」 へん 「我々の訴えはキリスト者のモラルに 関わる。 彼等の 「相手に即応する意見 opinions accommodantes」は余りにも妥協的無原則的で、 それはキリスト教道徳をゆがめ、すべてを曖昧にし「人々の悪 我々の敵はこのモラルを 破壊する道徳問題決疑論者であ つい

スカルは

大陸で忽ち絶滅の憂目を見たかもしれないのである。

とパスカルはパリの司祭達の言葉を援用しつつ論じ、あらためて、 mauvaises habitudes des hommes を根絶するどころか、 逆に正当化し、 「一方の頰を打たれれば他方の頰をさし出す」とい 人々の良心を眠らす手段を提供する」

らキリスト教道徳を強く打ち出すのである。

の東洋あるいは中南米のカトリック諸国に照らしても容易に察せられるであろう。 イエズス会の世界各地への布教が以上の如きプロバビリスムとアコモダチオなしには到底不可能であったことは、 ズス会は 協するというのである。それがキリスト教の神の法と時に対立することは不可避なのである。パスカルの当時からイ あることは明らかである。 せるもの」であるが、我々がモンテーニュで見た如き習慣的理性であり、各地の風習の如何によって異なり得る理性で はなく、自然的理性に属することが指摘される。ここで言われる自然的理性とは「隣人を殺していいか悪いかを判定さ(8) この『弁駁書』ではキリスト教の神の法と自然的理性 3 ロッパで不評をかっていたというが、やがてフランスでもその活動を停止させられることになる。 イエズス会のカズイスチックはかような自然的理性にのっとって、 raison naturelle とが対置され、 「敬虔な」キリスト教徒だけでは新 カズイスチックが 各地の風習に順応し、 神の法で しかし

て本当にパスカルは勝ったのだろうか。真理が真理性の争われ得る独自の場所を持つように、 である。 スカルの勝利である。 『プロヴァンシアル』自体が禁書の中に入れられるのである。しかし長期的に見れば、 『プロヴァンシアル』におけるパスカルの戦いは、 パ スカルが『第十二の手紙』で揚言した如く、議論の場では正しく道理あるものが勝つのである。 「ジェズィット」という言葉自体がペジョラティフになるほどイエズス会側はダメジを受けるの 短期的に見れば、 また政治的には、パスカルの側の敗北に終る。 また議論そのものとしては、パ 力は力と力とが戦い合う しかし果し

その独自の場所を持つ。そのことをパスカルは論争を通してさとらされたのではなかろうか。そしてそこに出てくるもの独自の場所を持つ。 することの困難さへの歎息、あるいは絶望とまで言ってよいものが感取されるのである。 仕切られる正義の向う側に住む人間(その中にはイエズス会のカズイストの何人かも考えられていたであろう)を説得 セ』でポツリと書いている「彼は川の向うに住んでいる」(L二○・B二九二)という謎のような言葉には、河一つで のがあの「結果の論理」であり、『パンセ』 における習慣の力の確認ということではなかろうか。 パスカルが

戦いを、はるかに縮少した規模ではあるがくり返す。そしてパスカルの戦いは、カルヴァンも恐らくそうであったよう である。この新教徒たちの改革に対抗しようとしたイグナチウス・ロヨラは、ある意味でより根源的原初的なものに遡 り遡ること百年、 って、力をもってローマ教会を守ろうとした。ロヨラの創始したイエズス会を相手にパスカルはカルヴァンとほぼ同じ パスカルは余りにも妥協的なイエズス会を批判して福音書の厳しい道徳に帰ることを説いた。同じことはパスカルよ 相手の持つ力の確認に否応なく行きつくのである。 カルヴァンがローマ教会を批判しつつ過激な改革を通して悪習を断ち切ろうとした時に目ざしたもの

第四章 『正から反への不断の転換』と『結果の論理』

られなかったことであろう。なぜなら彼は人を笑い嘲っているのだから」と書き「当のパスカルのほうが決疑論者だと 『プロヴァンシアル』を書いたことによってあの無神論者ヴォルテールへの道を開いたといえよう。それというのもこ モーリァックは『プロヴァンシアル』の論争を評して「パスカルがやっていることは彼みずからも罪と認めずにはい つまり彼は決疑論を使うのが 避け難いことを、 実例によって証明した」のであって、 「パスカル

sement continuel du pour au contre」(L九三·B三二八) それ自体が『パンセ』の「結果の論理 raison des effets」の断章の一つで言われる「正から反への不断の転換 自身もある程度このことに 気づいていたろう。 こではむしろパスカルに反対したイエズス会のほうが正しかったからである」と書いている。(※) 相手の主張を取り入れて行くものであるが『プロヴァンシアル』にもそれが言えるのではないか。 真剣に議論し合うもの同士は、 の典型的な一例と言ってよいのである 相互の批判否定を通して 互いに歩み寄 明敏なパスカ 実際この論争は だ renver

ら漸層的な構造を挙げている。ところでこの最後の段階は最初の段階にも帰ってくる。別の断章(L八三・B三二七) 知識人の考えを心得た上でその人を軽蔑する、 して生れの良い人を軽蔑する、 意見は正から反へと連続する」と書き、その例として、民衆は生れの良い人を敬まう、生半可な知識人は偶然の産物と らである。 定されるべきものを持つであろう。 ものとして否定するパスカルとの間の論争として解釈することができるが、 を破壊する意見を更に破壊せねばならぬ。 のを尊重する点で空しい。 る点でやはり空虚である。 民衆の考えに即応しようとするイエズス会のカズイスチック学者と、 「正から反への不断の転換」の図式は民衆の意見の評価をめぐって言われる。 彼は同じく「結果の論理」と題した別の断章(L九〇・B三三七)で、 したがって破壊の破壊を更に破壊せねばならぬというのである。 しかし他方で民衆の意見にはそれなりの根拠があって極めて健全なものを持つ。 真の知識人は民衆と同じ考えではなく、 なぜならこのパスカルのいわゆる「弁証法」は連続的であり無限に開かれているか しかし民衆の意見はどんなに健全でも、 しかし完全なキリスト者はより高い光りによってその人を敬まら、 背後の考えによってその人を敬まう、 パスカルの側のこの否定もやがて、 そのカズイスチック学者の意見を不健全な 「人が光を持つにしたがって、 真理のあらぬ場所に真理を置いてい 民衆の意見は何ら本質的でないも 『プロヴァンシアル』の論 民衆の意見 信仰者は 更に否 その

り、

その理由を示すのが他ならぬ「結果の論理」なのである。

の言うように、 破壊の破壊、 始めの自然的な無知と、すべてを知りつくして到達する無知とは、互いに触れ合うからである。そうで 否定の否定はどこまでも続くことになる。 『プロヴァンシアル』の論争自体がそうした論争であ

ピソードにもうかがわれるように、習慣は習慣であるが故にのみ従われるべきである、とするのはモンテーニュ自身で(ss) 結果の論理を見なかった」(L五七七・B二三四)と書いている。 ら法に従っているのでなく、正義だと信じているから法に従うのであって、単なる習慣と思えばもはや従がわなくなる あって、この断章でパスカルが言うことは、そのように言った点でモンテーニュは間違っている、 間違っている」は『パンセ』を初め編集したアルノーが「モンテーニュは間違っていない」と誤って訂正したというエ ないからである」 る。さもなければ、それがいくら習慣であっても従がわないだろう。なぜなら人は理性あるいは正義にしか服したがら あるとかの理由で従われるべきでない。 民衆はそれが 正義であると 信じるというただ一つの 理由で従っているのであ 「モンテーニュは間違っている。 この「結果の論理」が習慣・慣習の評価と深く関連していることは、 あらためて 注意されねばならぬ。 そのことは モンテーニュが単なる習慣以上のものでないとした法をパスカルは正義であり理にかなうというのだ。しかしそうパ ということである。 (L五二五·B三二五) とつづく断章の示すことである。 この断章の最初の一文 「モンテーニュは 別の断章でパスカルは「モンテーニュは習慣が万能であることを見た。 習慣はそれが習慣であるが故にのみ従われるべきで、それが合理的であるとか正義で 民衆は習慣であるか しかし彼はこの

ものでないことをもよく知った上でそう言うのだ。次の断章はパスカルのこの韜晦をよく示している。

スカルが言う理由は

「結果の論理」によってであり、

「背後の考え」によってであって、正義の法がやはり慣習以外の

一法律は正義で

ことである

ものとして批判した。同じ平手打ちをここでは、それ自身の理由を持ち、力を持つものとして肯定する。

パスカル自身

慣習が第一章に見たように「新しい光」の下に見直される。それは一方でモンテーニュを否定しつつ、他方で肯定する る」(T六六・B三二六)。 この断章全体が「不正」 という表題で締め括られていることはパスカルのきびしいイロニ 解させ、 これこそまさに正義の 定義であることを 理解させることができれば、 それによってすべての反乱は防止され から民衆に対しては、 ないと、民衆に言うのは危険である。なぜなら民衆はそれが正義であると信じるが故にこそ従っているからである。 異を唱えるようでいて、実は(たとえ背後の考えによるにせよ)モンテーニュと同じ保守主義に還ってくるのである。 いからではなく目上だから従がわなければならないのと同じであるように、と言わねばならない。このことを民衆に理 ーと言うより、むしろパスカルの誠実さを示すものであろう。パスカルはこうして一見モンテーニュの習慣・慣習論に 同時に法律は法律であるがゆえに従がわれなければならない、ちょうど目上の人には彼らが正

頭に『プロヴァンシアル』の論争があったことは確かであろう。そうでなければ「平手打ち」がここで出てくるのはい 換」を言う同じ「結果の論理」によって明らかであるが、この断章で「平手打ち」を引き合いに出す時、 れようというのだ。もっともかように健全な民衆の思想も根本的には空しいものであることは「正から反への不断の転 する、そうした民衆を健全だとする。頰に平手打ちをくらっても何とも思わないような人間は侮辱と貧窮におしつぶさ そのものよりも狩りの方を好み、貴族の生まれや財産という外面的なもので人を区別し、頰に平手打ちをくらえば憤慨 にも唐突だからである。 パスカルは別の断章(L一○一・B三二四)では「民衆は極めて健全な思想を持っている」という書き出しで、 パ スカルは、 平手打ちに対して報復することを認めるカズイスチック学者を福音書にそむく パスカルの念

プロバビリスムを受け入れ、 手の論法を自分に取り入れているのである。 カズイスチックを使っていると言ってもよい。

彼は意識的にか無意識的にか、

批判した相

意見の対立をあげて、 根拠を持つという形で認めることであり、またあらゆる主張がそれ自身の何らかの理由と根拠を持つという形で肯定す る論理であった。 のことである。 から見て、パスカル自身も認めていたことである。 このことは非難すべきことだろうか。そうではない。 弁証法はそのアリストテレス的型態においては、対立する双方が共にそれぞれの理由を持つことを認 同じことは実はパスカル自身が『プロヴァンシアル』 そしてそれは今日の イエズス会神父に向かい、 「新しいレトリック」の哲学において、 神父がかような意見の対立に慣れるよう希望する、 それは論争ということ自体の持つ弁証法的性格から言って当然 の 『第十七の手紙』でカトリッ 現実の対立する力はそれぞれその理由と と言っていること ク内部での様々な

風習 アル』直後に書かれた『幾何学的精神について』の第二部を「説得する技術」にあて、 そうであればその認識から出てくるパスカルの護教論 争の少なくとも中盤までのパスカルは、 て行ったのではないか。 由を理解しようとする態度に欠けていたこと、 イエズス会のプロバビリスムやカズイスチック、 レト 習慣の持つそれぞれの力、 ij ックをとりこんだ説得的、 その認識から出てきたのが それぞれの理由への洞察がある。 弁証法的なものとなる筈である。 純粋ではあるが一面的であること、を否めないのである。 そのことをパスカルは、 7 「結果の論理」であり「正から反への絶えざる転換」ではない コモダチオの背景には、 apologie はもはや単に論証的なもの、 この洞察と対比する時、 論争の持つ弁証法的性格を通して、 そうであればこそパスカルは 社会の各階層、 説得することの困難さを訴える **『**プロ 幾何学的なものではあり 世界の各文化、 ヴ 論争の相手の持つ理 ァンシアル』 『プロヴァンシ 気づかされ 各民族 0

第五章 「気に入る agréer こと」と身体の習慣

困難、 知られるように幾何学的論証特に定義を扱うものであって、意志を介する説得術ではなく、 は明確でなく、 技術」には二つの方法が分けられるとして、その一つは「気に入る agréer」方法であり他は「確信させる convaincre」 て」の部で扱うことを「確信させる」方法に限定するのであるが、この「確信させる」説得術とはコンテキストからも 方法であるとし、後者は明確な証明が可能であるのに対し、前者の相手の気に入ることによって説得する方法は極めて 者の方であって、後者はあらゆる人間に共通な欲望、例えば幸福でありたいという欲望を原理とする、とパスカルは言 け入れられるには知性を介する場合と意志を介する場合とがある。この内自然的なのは前者であるが、 「説得する技術」はこの後者の、意志を介する場合を指すように見える。ところでパスカルは更にこの「説得する スカルが 微妙、有用であり、 『幾何学的精神について』の第一部の幾何学の証明方法の中に入れられるべきものであって、第二部の説得術と 「説得する技術 人によって異なり、 | 驚嘆すべきものであるが、私にはそれを扱から能力がないとし、その理由として快楽の原理 art de persuader」について論ずることは、必らずしも明確でない。意見が人の魂に受 時によって異なることを挙げている。 こうしてパスカルは むしろ知性を介するそれで 「説得する技術につい 一般的なのは後

ルの念頭には「私達の気に入るようなこと choses agréables を言って下さい。そうすればお話しを聞きましょう」と パ スカ ハルが、 気に入ろうとする説得術は困難で自分の手に負えないが有用で驚嘆すべきものであると言う時、 パスカ

いう表題から我々が期待したものとは程遠いものなのである。

問題となって行くだろう。 モーゼに言ったというユダヤ人と並んで、(at) よく知られている。 スの『レトリカ』の伝統をつぐレトリックを措いて他にないであろう。そしてそれは『パンセ』では「表徴 figure」の 説き得るものは幾何学的なものでもなければ、 ためのものであるが、それはパスカル自身言うように宗教的真理の説得には応用できないものである。 かに困難なものであり、 番気に入る方を選べばよいのです」と答えたというのである。そんなカズイスト達をも説得できる術 互いに対立する多くの 意見からいずれかを 選ばねばならぬ時どうしたらよいのか、 と問われてその神父は しかしここではこれ以上レトリックの問題には立入らない。 さすがのパスカルにも手に余るものであったろう。 パスカルにおけるこのレトリックの問題が近年多くの研究者の研究対象となっていることは 『第五の手紙』のイエズス会の神父のことが浮んだであろう。既に引用した スコラの弁 証 法の系統を引くカズイスチックでもなく、 パスカルが扱かう説得術は「確信させる」 宗教的真理をも アリストテレ ――それは確

automate としての身体の制御のそれとして出てくる。 また身体を介して精神に関わるものであって、 我々がこの論文でこれまで論じてきた「習慣」とは性質を異にするところがある。これまで我々は、広い意味での 分自身で納得するための方法、 概念としての)習慣の内、 スカルの習慣論を問題にしている我々がどうしても触れなければならぬのは、 身体の習慣は、 社会的意味合いのこい慣習、風習としての習慣と異なって、個別的身体に関わるものであり、 主に慣習の方を扱ってきた。 いわば自分向けのレトリックとしての、身体の習慣である。 この問題はパスカルでは、 我々はデカルトの問題圏に移ってくるのである。 それはその意味でモンテーニュ的習慣の問題圏に属するもので デカルトの 宗教的真理を自己自身に説得し、 動物機械論を受けて、 この身体の習慣の問題は、 自動機械 (類 自

それは「自分を誤解してはならない。我々は精神であるとともに自動機械でもある。そこから、 説得が行なわれる道

パスカルと習慣の問題 の用語法が恐らく念頭にあったであ ろう) による信仰を獲得しなければならない。 習慣による信仰は無理なく技巧も スカルはこの断章でそれまでは coutume の語を用いているのに、ここでのみ habitude の語を使っている。デカルト なら真理の証明を常に眼前に保つのは煩わしいことだからである。 ものになる。 て行く。」 信仰の障害でもあった身体(自動機械)が、一旦信仰を受け入れた者には、 れることである。論証され得るものは限られている。しかも論証は精神しか確信させない。 具が単に論証だけではない、ということが出てくる」という文章で始まる断章(L八二一・B二五二) から逃れ去ろうとするこの信仰に我々を浸らせ、我々を染めこむためには、習慣に助けを求めなければならない。 において主張する。同じ断章でパスカルは次のように書く。「精神がひとたび真理の在り場所を知っても、たえず我々 してもそれを習慣としなければ効果あるものにならない、としていることを見たが、同じことをパスカルは信仰の真理 々の最も有力で最も信頼できる証明である。習慣は自動機械を動かし、自動機械は精神を知らず知らずの内に引きずっ 我々は「デカルトと習慣の問題」(『カルテシアーナ』第六号) の第五章で、デカルトが、 我々はより容易な信仰、すなわち習慣 habitude (パ 却って精神を信仰へと向わせる 「習慣 coutume こそが我 一旦真理を認識 で明確に主張さ

名な「賭け」の断章(L四一八・B二三三)で「賭けの理論」にもかかわらずなお信じ得ずにいるものに対してパスカ ルが勧める方法である。すなわち既に信仰を得ている人に見習りことであり、自分が既に信仰を得ているかのように振

ここからしてパスカルの次の思い切った言葉が出てくる。

トルコ人、

多くの人が

それはあの有

人、兵士等をつくったのも習慣」なのである。

うに仕向ける」と**。**

信仰に至るのはかようにしてである。「かくも多くのキリスト教徒をつくったのは習慣であり、

なく議論もなしに我々に事柄を信じさせ、我々の全能力を信仰に向わせ、かくして我々の魂を自然にそこに落ちこむよ

習慣は身体・自動機械を喜ばせ、それを通して精神の「気に入る」というのであろう。

その意味で文字通り「動物の如くならしめる」ことであるが、しかし単に獣の如くなることではない。「愚かになれる」 御の法が、 列であり、 舞うことである。 『情念論』で犬をも訓練できるような方法、つまり動物にも人間にも等しく適用可能な方法として言ったものであり、 愚かになれる vous abêtira であろう」と。この「愚かになれる」という言葉が物議をかもしたことはよく知られ 野田又夫氏はこの abêtir という語は 「獣の如くならしめる」 というつよい語であって聖書の言う愚かさと同 パスカルによって、 またデカルトの動物機械論を受けて、 つまり 「聖水を受け、 信仰への途上に採られている」と書いている。この場合の情念制御の法とはデカルトが ミサを唱えてもらうことである。 そうすればおのずと信じられるようになる 機械的自動的な習慣を得るということであって、 「デカルトの情念制

とパスカルが書く時、

起していたであろう。

パスカルはモンテーニュの智慧にも帰っているのである。

彼は「賢くなるためには愚かにならねばならない」と同じ言葉を使って言ったモンテーニュを想

慣に止まるものでない。それは同時に内なる会話でもある。パスカルは言っている――「人間は、 段としての外的習慣を自動機械説から取ってきたのだ、と書いている。しかし人間の場合それは決して単なる外的な習 ニスムの極端な厳格さがその意図に反して、却って人々の放縦を誘うものであることを考慮し、 térieures par ces habitudes extérieures」と書いている。この言葉にブランシュヴィクは註して、 由を「なぜなら人はかような外的習慣によって内的徳に慣れるものだから car on s'accoutume ainsi aux vertus の断章 (L九一二・B七八一)でパスカルは物事をなるべく希望のある側面から考えるべきことを言って、 回心のための有効な手 パスカルはジャンセ お前は馬鹿だと人か

つも自分で自分に言っていると、いつしかほんとうにそう信じてしまうようになるものである。 らいつも言われていると、いつしか自分でもほんとうにそうだと信じるようになるものであり、また自分は馬鹿だとい なぜなら人間は自分ひ

語る手段となっていることを見るのである。 とができる。」(L九九・B五三六)ここに我々は習慣が単なる自動機械説得の域を越えて、内なる対話を通して神と とりで内的な会話をするからである。 我々が真理として知っている神とだけ語るようにしなければならぬ。その時我々はその真理を自分に納得させるこ 大切なことはその会話をよく調整することである。 ……我々はできるだけ沈

方法と合致することを論じている。(36) 過ぎない(L八○八・B二四五)。他の二つの手段すなわち理性と霊感の方がキリスト教にとっては問題なのであろう。 もゆっくりと知らず知らずの内に展開することによって人々を心地よく慣れさせるのがイエズス会のやり方だと言って 習慣は出発点でしかない。 るのであり、特定の信仰に限られないからである。実を言えばパスカルにとって習慣は信仰の三つの手段の内の一つに た後でつづけて「だがそれが私の心配する点である」と附け加えたのもその故であろう。習慣は人間を何にでもなし得 たのである。 のそれでもあったろう。パスカルはあらゆる偉大な宗教に通ずるこの習慣という方法の持つ力を改ためて注目し強調し ナチウス・ロヨラのそれでもあったろう。パスカル自身『プロヴァンシアル』の『第四の手紙』で、 飯塚勝久氏は『フランス・ジャンセニスムの精神史的研究』の中で、 習慣の方法はそれどころか、トルコ人のそれでもあり、 習慣に問題があるとすれば余りにも普遍的であるということだろう。パスカルが「愚かになれる」と言 しかし習慣は三つの手段の内恐らく最も容易かつ一般的でしかも強力な手段なのである。 貴重な指摘であろう。しかし習慣の方法は同時にイエズス会士のそれであり、 異教徒のそれでもあり、 パスカルの習慣論がサン・シランの魂の指導の 更には我々の偉大な仏教指導者 最も極端な意見で イグ

評価することは、

教会への服従や中等教育の推進と並んでイエズス会を特長づけるものなのである。

イエズス会の第一主張として、

努力の重視をあげている。

努力を高

救済において自由

ムーはその著『イエズス会士』の中で、

28 な努力、自由意志、をどう評価するかは『プロヴァンシアル』の争点の一つでもあった。イエズス会の学校に学んだデ カルトがその動物機械論にもかかわらず道徳論において自由意志、それも努力と結びつく自由意志(それがデカルトの

い、自動機械支配のための習慣を説くのと 対照的である。 ところで 努力への高い 評価はフランス・スピリチュアリス 「高邁の徳」に他ならない)を高く評価するのは、ジャンセニスムに従がらパスカルが意志を介する説得の困難さを言 特にメーヌ・ド・ビランとベルクソンとを結ぶ太い糸の一つである。そしてそこに展開される習慣論もこの努力の

問題と深く関わることになるであろう。

1 G. Funke, Gewohnheit, Archiv für Begriffsgeschichte, Band 3, 1958 『パンセ』の習慣論を扱ったものとしてここでは次の書を挙げておく。

前田陽一『モンテーニュとバスカルとの基督教弁証論』 昭和二四年、創元社。特に第二部第四章。 和田誠三郎『パスカル「パンセ」研究序説』 昭和六十年、青山社。

三宅中子『習慣と懐疑モンテーニュ・パスカル・ベルクソン』 一九八五年、南窓社。

飯塚勝久『フランス・ジャンセニスムの精神史的研究』 一九八四年、未来社。特に一七九ページ。

田辺保氏もその『パンセ』訳において(『パスカル著作集』教文館、Ⅵ及びⅦ)パスカルとモンテーニュを詳しく対比してい

またパスカルの 『パンセ』 とモンテーニュの『エセー』の対応については B. Croquette, Pascal et Montaigne, Droz, 1974

バスカルでは loi, mode 等の語も習慣とほとんど同義に使われている。(「習慣」「慣習」の語については拙論「モンテーニュと はコンテキストに応じて「習慣」「慣習」あるいは「習慣・慣習」と訳し、habitude の方はもっぱら 「習慣」 と訳した。なお なおパスカルはモンテーニュと同じく coutume の語を用いることが多いが、habitude の語も使っている。 我々は coutume

習慣の問題」を参照されたい――『カルテシアーナ』第五号)

- 2 る), pp. 230-2. Préface sur le traité du vide, l'Oeuvres complètes de Pascal, Editions du Seuil(この全集本は以下の注では OC と略す
- (m) OC, p. 232
- 4 うだが、ここではパスカルのものとして議論をする。 Discours sur les passions de l'amour, OC, pp. 285-9. この小論文が真正にパスカルの手になるかどうかに問題があるよ
- 5 特性」と取ると、対立することになる。『愛の情念について』の中でも二つの精神が論じられているだけに我々にとって重大で ある。しかし「精神の諸特性」を、恋愛のそれに限って見ることができる。いずれにせよ「精神の諸特性とは何か」「その特性 OC, p. 287. この言葉と、 我々が先に幾何学的精神と繊細の精神とについて語ったこととは、 この二つの精神を

のどこまでが習慣によるか」をめぐって問題が残ることは確かである。パスカルの言葉自体に曖昧があるからである。

- (6) Entretien avec M. de Saci, OC, pp. 291-7.
- (7) OC, pp. 295—6.
- 8 Les provinciales, OC, pp. 371—469. 中村雄二郎氏訳(人文書院)、田辺保氏訳(教文館)をも参照した。
- (9) 野田又夫『パスカル』昭和二八年、岩波新書、一二八ページ。
- 新論』の第四部でイエズス会のプロバビリスムにある程度賛同しつつ、プロバブルの意味が狭過ぎるとしてその拡張を主張して なかろうか。この理論には確率論的装いの下に道徳的宗教的なものが顔をのぞかせるのである。またライブニッツが『人間悟性 的「プロバブル」から道徳抜きの「プロバブル」への移行過程の一つとして興味深いのがパスカルの他ならぬ「賭けの理論」では いるのも、移行過程の一表現と言えよう。 (Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, Liv. IV, Chap. II, § 14) 「プロバブル」のこの意味が今日全くすたれていることはラランドの『哲学用語辞典』にも指摘されているが、かような道徳
- (\(\pi\)) OC, p. 390.
- (2) Ibid
- Kant, Metaphysik der Sitten, 2 Teil, -八ページ参照 森口美都男、佐藤全弘訳『人倫の形而上学〈徳論〉』中央公論社『カント』、

- (4) OC, p. 397.
- (H) Ibid.
- (16) OC, p. 413
- (1) Cf. OC, p. 401.
- 18 Cf.OC, p. 429. 同じ趣旨をパスカルは『第十八の手紙』でもくり返して言う。OC, p. 464.
- (9) Cf. OC, p. 387—8.
- (ℜ) OC, p. 388.
- (전) Factum pour les curés de Paris, OC, pp. 471-6.
- (X) OC, 474—5.
- (\mathref{math
- 24 この点では渡辺一夫著『フランス・ユマニスムの成立』(岩波全書)第八章「ジャン・カルヴァンの回心」が興味深い。
- モーリヤック『パスカルとその妹』安井源治、林桂子訳、昭和三八年、理想社。一六六ページ及び一七四―五ページ。
- 法律であるからである。それこそ法律の権威の不思議な根拠であって、これ以外に何の 根拠もない……。 法律が正義であると 九五ページ)にこの点に関して注がある。 セー』の個所として挙げるのは『エセー』第三巻第十三章に出てくる「法律が信用されるのはそれが正義であるからではなく、 もっともモンテーニュ自身はこのようにはっきり言ってはいないようだ。クロケットが『パンセ』のこの個所に対応する『エ 松浪信三郎訳『パンセ』(世界文学大系、筑摩書房、二一六ページ)、田辺保訳『パンセ』(パスカル著作集団、教文館、一
- (8) ベレルマン著三輪正訳『説得の論理学』(理想社) 及び三輪正著 『議論と価値』(法律文化社、 昭和四七年)を参照された

いう理由で法律に従がう人は、然るべき正当な形で法律に従っているのではない」 という言葉である。 Cf. Croquette, op. cit.

- (\mathref{M}) OC, p. 458
- De l'esprit géométrique, OC, pp. 348-59. Cf. Ed. Brunschvicg, pp. 164-96.

- (32) 「習慣」「慣習」の語の使い分けについては三輪正著「モンテーニュと習慣の問題」『カルテシアーナ』第五号、三―五ページ (젊) OC, p. 355.
- 参照。
- (3)) この点については三宅徳嘉氏が人文書院版『パスカル全集』第Ⅱ巻付録に書いていることが興味深い。
- Pascal, Pensées et opuscules, Hachette, p. 692, note 5.野田又夫著、前掲書、一九五ページ。
- Cf. OC, p. 432.

37 36 35 34

38

Alain Guillermou, Les jésuites, P. U. F., 1963, p. 18.

(文学部教授)